

「研究の展覧会」について

2012.11.16 北 雄介

「研究の展覧会」は、今回の展示を第一回とする一連の展覧会の通しタイトルです。とは言っても次回の予定も、誰がやるかも決まっていません。ただこの企画には、私の研究者としての思いを込めています。

「研究の展覧会」では、以下の3つの目的を掲げています。

- 1) 研究者ではない人に研究を知ってもらう
- 2) アカデミック界の「発表」の形式に対するオルタナティブを提示する
- 3) アートとしての研究を構想する

まず1)は、研究と社会との関係についてです。研究という言葉からは、たとえば白衣を着て実験室に籠っているような姿が連想されると思いますが、それが社会に貢献していると言うのであればただ籠っているだけはいけません。研究成果は研究者以外の人にも開かれるべきです。論文の本数だけを追い求める「研究のための研究」という罠に陥らないためにも、研究者と社会との直接の接点が必要だと思えます。

この外部との接続不足は同時に研究者コミュニティ内部の閉鎖性を意味しますが、これが目的2)に対応しています。アカデミックの集まりでの発表の形式について、私が毎年参加する「日本建築学会大会」を例に説明します。これは日本全国の建築系の研究者が1年間の研究の成果を発表するイベントですが、その内容はわずか2ページの論文にまとめなければなりません。著者名を研究室の後輩などにすぐ替えれば複数編発表できる仕組みもありますが、それにしても少ない。またこの論文にパワーポイントを使ったプレゼンテーションがセットになっていますが、これも持ち時間がわずか8分(うち2分が質疑)というものです。このように、研究の世界ではその成果発表の形式がほぼ決められています。

このことは研究者の思考を大きく制限しています。つまり数ページの論文と数分のプレゼンテーションで表現できる範囲に、研究の枠が狭められがちになってしまうのです。そこで私は「展覧会」というアートの表現形式に仮託して、この枠の乗り越えを試みようと思えます。

これは3番目の目的と符合します。つまり研究をアートとして捉え、自由な方法で、かつよく表現しようということ(古典美術よりも現代アートをイメージしてください)。ただ私はここで、表現面にもまして研究の内容やそれに向かう態度として、アートを参照しようと思えます。アートの創作動機は、自分の内から出てくる感性や思想の発露という面が多くを占めます。これは、一般に「デザイン」という言葉が特定の個人や企業、あるいは社会というクライアントのニーズを充たすための創作を指すのと好対照です。

なぜデザインよりもアートの立場をとるのかというと、これも2)で述べた思考の自由度と関連します。クライアントの存在もやはり、思考の広がり制限するのです。実際にやってみると、「ある企業のための研究」「ある街のための研究」よりも「自分のための研究」の方が、自ら感じるままに進められる身軽さがあります。では1)で述べた社会貢献はどうなるのかと言うと、直接的に社会に役立つ知見や技術を示さなくても、自由に理論を構想した結果、それが深いレベルにおけるものごとの考え方に影響するというような貢献の仕方でもいいと思えます。これは伝統的にアートや哲学が担ってきた役割です。

以上のような考え方は、私が建築・都市分野の研究をしているからこそ生まれたのかもしれませんが。たとえば新薬を開発すればいずれ商品化される薬学の研究などとは違って、建築や都市はそれぞれの場所にあまりに根ざしているために現場の知が強く、そこに研究の成果が活かされにくいのです。活かそうとすれば「ある街のための研究」のような枠に縛られ、またノウハウも属人的なものに留まりやすくなります。

幸運なことに、5年前に私が始めた「様相」の研究は、自分の興味の赴くままに進めた「アートとしての研究」でした。そこで今回、とりあえず「研究の展覧会」という旗を掲げてみたまでです。これが今後も続いていくのか、それとも一度限りの企画に終わるのか、今の私にはわかりません。この旗が、また思考に枠をはめてもいいかもしれませんから一。